

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	漂遊記（一節）：文苑
Author(s)	布峰生
Citation	龍南會雜誌， 88： 38 - 47
Issue date	1901-11-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5240
Right	

文苑

冊八

漂遊記 (一節)

布 峰 生

さびしさに人戀わたる夕ぐれの

月ぼそ間近く鳴くほこゝさす

七月母を葬りて未だ三旬ならず、家を棄て、復た他郷の空に流浪らひ出でなんとす。三年は愚か七々四十九日の間だに、廬を墳側に營みて、靜かに亡き人の魂を慰めまつる術を知らず。何者の不幸兒ぞ、身を漂漾たる雲水のゆくへに委かせて、天地浪々の瘦せ姿を、ひたぶるこのせちがらき浮世の風雨にさらさんどす。吾はわが天性の愚を患へず、唯だ深くふかく、わが天賦の甚だ狂に類するものあるを恨む。

温たかく、優さしく、美はしかるべきホームを立出で、さて行先は那邊ぞ。金貨、金時計、金鍵、金縁眼鏡、あらゆるものゝ總てあやしく黄色に輝やく紳士の群れか。綾羅錦繡、東西にすれかひ、ハイカラ、コスメチックに、所謂新智識の交換盛んなる都府か。さては流笛の響、烟突の烟に、所謂新文明、新開化の、ありがたき聲と色とを経験し得べき工業地、貿易場か。あら詩小疵だ

わなく、抱負に乏しき哀れなる不具兒は、到る處に不骨なる江山と江水とを尋ねて、礼拝し塵外と名のつく風雲の末に、果敢なき蜉蝣の一生を托しめんとするのみ。

一ヶ月三十日、殆んど絶間なく降りつめたる霖雨の、今日に至りて初めて晴れわたりたる日、喜が行手の途の安らかに、幸多かるべき兆なるらむ。海より来る清風、一陣毎に鬱陶しき大空の雲の名残を、南方の山地へ、山地へと吹き縮む。

廣瀬橋上に立ち、仰いで今別れ行かんする故郷の影を望み。俯して大江の水の、汪洋として流れ盡きざる姿を観る。此時わが小さき狭き胸には、千思萬感、かづく湧き來りて、暫し自ら途上の人たるを忘れたんぬ。而してわれはうも何の爲に、かゝる装束して、此所には出で來りしかを自から疑はざるを得ざりき。青葉しげれる彼方の小丘には、わが最愛の母土の、どこしへに静けく眠りませるがあり。吾はさて、此思ひ繁き故郷を立離れ得べきか。大江の水は滔々として日夜東流して休まず、逝く者は皆かくの如し。吾は此水を渡りて、さて何時か復た懐つかしき故郷の地を蹈むべき。

吾は従前既に幾度も、『人生』なる問題の前に、煩悶夜を徹するの愚を演じき。然り實にそは愚ろかなる煩悶なりき。われ能く其及ぶなき愚なるを知る。而かもわが天賦の愚や、遂に此愚と別れ去る能はざるを奈何。斯くて吾は遂に此愚と心中せざる可らざるか。『人生』なる問題は、實に人生の最初の問題にして、而してまた最終の問題なりや。

文

市の西隅、熊本縣道に出づ。白晝十字街頭に立ちて、思ふところ何。高帽、八字鬚、意氣揚々、馬車を驅る田舎紳士あり。天秤棒を後生大事に擔ひゆく小商人あり。魚賣りありくあり。肥料車押し行くあり。鈴の音チャラ／＼の馬逐、塵煙立てゆく荷馬車牽、巡查の白きサーベル、子守兒の赤手拭。げに浮世の生活は、色々なりけり。大きなと小さきとの區別はあれ、彼等は皆それ／＼の希望皆それ／＼の抱負の下に、奔り、飛び、歩み、且つ跳ねつゝあるものなり。其職業を賤しとせけすむ勿れ。其風采を野卑なりと嘲る勿れ。彼等は皆神より賦與せられたる能力に應じて、忠實に、勤勉に、力一杯に、或は力不相應に、泣きつゝ、苦みつゝ、顔をしがめつゝ、人生の旅行をなしつゝ、ある者にあらずや。吾はその希望のあまりに小さく、其抱負の餘りに低きを笑ふに忍びず。却て彼等の正直なる、忠實なる、心懸けの殊勝さを関むの念禁する能はざるなり。

苑

翻りてわが身を思ふ、弊衣、短葛、破帽、敗鞋の衰れなる浪人姿、行人織るが如き街頭に、異彩(?)を放ちて茫然佇立せる間抜け顔は如何に世に頼もしげなき、見すほらしき肖像なるよ。吾はさきに彼等を関むといへり。而かも彼等よりしてわれを見る、如何に恰當せる憐閔の對象なるよ。二十面さげて此ざまは、學問といふありがたきものせし才子の、當然落ち來るべき境遇なるか。吾はさきに彼等の希望、彼等の抱負を低卑なりといへど。而かも果して余自身の希望、余自身の抱負は如何なるものぞ。漠として雲を攫むが如く、窺としてまぼろしを見るが如き超世間的の希望、妄想的の抱負は、實際世界に其存在を認めずといはば、吾が希望と、抱負とは、正に全然「無」に属すべきものなり。吁自ら好んで此無に等しき希望と、抱負とを、果敢なきまぼろしの末に画きて、

賑は其の面白かるべき人生を、わざと淋しく、つらき夢の間に鎖し去らんとす。吾はぬが心の狂味あり、益々世の常のものにあらざるを感ず。

○

天神橋といふは、佐賀縣道に添ひて、大分より二里餘、由布川の清流に架せるものをいふ。日常親しく睦みあへる友某に邂逅して、暫らく此橋畔に物語りす。友はこたびの試験に、意外の失敗を招きたる人、吾は是れ新愁の薄倖兒、兩々相對して、話頭どかく活潑ならず。

惟るに、人は憂愁の時、失敗の時ほど、才鋒鈍り、愚痴に傾く時はあらざるべし。彼等は憂ふ。而かも憂は智の何物をも含まず。彼等は其豫期せるところのものを失へり。而かも愚痴は、其失へるところの何物をも與へず。含まず、與へざるのみならず、憂と愚痴とは、なほ一歩進みて、人心を害はずんば休まず。憂ふべきは憂其ものにあらずして、却て其憂に沈むの時に在り。悲むべきは、失敗そのものにあらずして、却て失敗せし人の弱き心に在り。吾れ故に曰ふ、憂をして、憂そのものに止らしめ得る者は幸なり。失敗をして、失敗そのものに止らしめ得る者は賢しと。ポーロ曰はずや、惟だ此一事を務む、即ち後に在るものを忘る、前に在るものを望む。』と。友の意想、またわが意想と全じ。

眼を擧げて彼方を看れば、斷崖峭絶して奔流これに激し、上に翡翠の碧天に映える色あり。下に白水の寒玉をあざむく姿あり。中に漁翁あり、危然たる巨巖の上に踞して、耳に鞞鞫の聲を聞きつゝ、姿は宛然ら睡れるが如し。神の教ふる最も賢き人間の生活法は、蓋し全く此一画圖中に默示せられ居るものと謂ふべし。

友は靜かに田園の間に起臥して、默想の裡に心田を練り。吾は山河に放浪して、飽くまでわが狂熱の發暢を擅にせしめんとす、人は云ふ、是れ火を消さんどて、更に油を注ぐものなりと。而かも吾は此方法の外に、わが狂熱をなだむるの道あるを知らざるを奈何。

此夕べ、われ由布川の中流、眞加田といふに宿す。連日の降雨に河水漲溢し、奔々たる流勢、岩を洗ひ、石を掠めて、瀬聲一村の人語をみだる。欄により微吟す韋應物の詩、

夾し水蒼山向し東。

東南山豁大河通。

寒樹依微遠天外。

夕陽明滅亂流中。

少刻にして、天暮れ、地暮れ、山河冥合すれば、六日ばかりの新月、茂林墨の如き上流に浮ぶ。一道大江の水、宛然ら白金をどかして流せるに似たり。倏ち紫星一顆、空より隕ち來りて、わが面をかすめ、横さまに河上に至りて消ゆと見れば、是れ言はず、語らず、獨り身を燒く哀れなる螢火の光なりけり。此時われ何を思ふともなく潜然として泪の頬を傳ふを覺ゆ。

清瑩玉を洗ふ由布川の上源に、一温泉地あり。湯の平といふ。其地山高ぐ、溪深く、炎暑八月の深山隠れに、あは婉轉たる鶯語の滑らかなるを聴くべし。われ此所に來りて、清純水晶を欺むる炭酸泉に、日來の俗塵を洗ひ流すこと兩三日。滿膚無垢清淨となりて、精神亦爽やかに、此行初めて、自ら自然に親む自然の兒たるを感じろめき。

殊に地避なれば、浴客の到ること寡く。通路辛うじて車馬を迎ふといへども、元より坦々たる平道と其撰を異にすれば、無暗に氣障な、粹かと、通とかを銜ふ當世紳士、淑女連の御來臨もそれな

く、囀鳴きて夜明け、囀鳴きて晝終るあした夕べ、與に語るところの者は、深山に木を樵りて野邊に稻麥を友とする、無禮にして、しかも最も有禮なる、不品にして、しかも最も上品なる、山の子、野の子、また神の子の老幼男女、或は口不調法にして、却て眞實の溢るる饅頭屋の老爺。田舎に生立ちて。狷介不屈、漫りに人に腰を折り、猥りに人にねべツかを使ふことを能く知らぬ代りに、店頭には常に塵堆かく積るてふ、射的場の若主人等のみなれば常には胸先きに込上げて、われながらわが心の始末に困ること往々なる不平の塊も、こゝには其影をたに顯はさず。心よく眠りて、心よく起き出づるを得たるわが幸福を、吾は厚く天の神に感謝せんと欲する者なり。

○ さて此安樂境に於ても、われはなほわが心に、暗く、寂みしく、味氣なき半面ありしことを記するを忘るゝ能はず。

向ひの温泉宿の白き板屋根に、今の今まで、きら／＼と輝き居りし夕日影の、早くも逃げ去りて、狭きこゝの谿一面は、次第に森より湧くうす闇の色に、淡はき、淋しく暮れ往かんとする夕べ。われ瀑なす小川の石上に坐して、折から行く水の流れの末に、夕映のをかしく匂ふ色あるを眺めぬ。そは實に妙へなる色なりき。而かもわれは白狀す、其妙へなる色のうちにはなほわが鈍き眼にも、認識せざるを得ざる、ある淋しき、暗き、冷やかなる色の含まれ居たることを。人や聞はん、爾が心の影にては無かりしかど。わが心の影なりしやも知るべからず。然れどもわれはなほ加へることを想像するを禁する能はず。大宇宙に満つる森羅万象には、總て喜びと悲みとの兩意味、併存せるにはあらずやと。

物理學者は、万物皆陰陽の兩電氣を併存せることを説く。わが謂ふ悲喜の兩意味も、また其狀態に於て、甚だこの陰陽の兩電氣と相似たるものあり。只だ電氣に於ては、陽電氣來りて一物体に近づくれば、異性相引き、同性相弾くの規則に基き、乃ち陰電氣を其われに近き一側に集むると共に、他の遠き側に、陽電氣を排斥すれども。わが謂ふ所の悲喜兩意味包含説に於ては、人が悲みの眼を以て一物象に對すれば、即下に其一物象中に、異性の喜びを絶滅せしむると同時に、同性の悲みの意味を、獨り跋扈せしむと説くものなり。故に其規則は、全く電氣のと正反對にして、同性相容れ、異性相害ふものなり。それ故に本來の性質に於ては、正反對なるを免れずといへども、而かも其大體の組織、狀態、即ち兩性より成りて、互に相感應し、しかも平常は、兩性とも均一に相和合して、互見何等の意味も、性質も、こもり居らざるやうなるは、豈全然一致するところのものにあらずや。さればこの事、總て皆人の心に存すべし。われ強めてまた何をか言はん。唯だわれは此時、いかにしけん、斯る妄想を逞しうせざるを得ざりしもののみ。

くおふ夕暎の色を、淋し、暗らし、冷やかなりと觀じたるわが心には、既に新らしき先きの日の此煩らひ繁げき俗世を見棄て、突然、多幸多福なる上天に昇りましたる、吾が亡き母上を懷ひ出で居たるなかり。

○

吾は元來此世界を讚美し得る程の、所謂樂天家にあらず。また樂天家たることを願はず。否樂天

家にあらず、また樂天家たるを願はざるのみならず。寧ろ一步を進めて、此混濁せる所謂浮世を

最も烈しく憤り、且つ憎む半狂人なり。而かも吾は之を憤り、之を憎むが故に、世の常の厭世家の如く、一生深山に隠れ、竹林に退きて、其身一個を清く、靜かに、生活せしめんと欲する者にもあらす。誠にわが性格と、本領とは、聊かこれらと其趣を異にするものあるを自信す。

吾は現世を濁れりと思ふが故に、敢て之を避けんとは思はず、不才ながらも、なほ之を清めんと欲する者なり。浮世の人の多くが、悉く眠り居るが故に、敢て之を棄てんとは思はず、不敏ながらも、なほ之を醒ましんと志す者なり。不才不敏はわが天賦なり、天性なり。而かも此天賦あり、天性あるが爲に、われは世上に充滿する、あらゆる罪の子を見殺しにしてまで、敢て己が一身の安全と、清節とを、保たんと努むる程に、大膽無謀なる能はざるなり。或は人却てわが此心事を目して、大膽なり、無謀なりと笑はん。大膽か、無謀か、われ之を知らず。また知るの要なし。唯我が性質として、常に憤り、憎むとを禁する能はず。而して此憤りと憎みとは、またわが心に、或る高尚なる救世濟民の大情想を、發生せしむる一大原動力とならざるべきか。吾はこの事を人類の當然盡すべき義務なりと信じて、常に或る靈なる力の助けを借り此原動力の、絶えずわが衷心に發生し、動作せんとを祈り居るものなり。

○
しかもわれ、今流れに匂ふ夕映の色を眺めたる時、——其妙へに、麗しき色の、次第々々に薄くあはく安らかなる天地の間に、消へ去りゆく姿をながめたる時、わが心に陶然として酔ひ來り、たゞ何となく、將に來らんとするものゝ戀ひしきが如く、懷つかしきが如く想ひなされ、わがこのうつし身は、何故に彼の夕映の色の如く腦みも、苦みも、悶悩もなく、安らかに、靜かなる彼の他界の

闇に、消へ去り能はぬかを嘆せざるを得ざりき。

人生五十、譬へば樵花一朝の短き夢に似たり。しかも既に『生』なるものある以上は、此紛々たる生活場裏に、豈何等かの意義の含まる、なからん。吾は飽くまで、わが生の貴きを感じ。あらゆる人間は、此存在に於て、必ずあるものを成すべく義務づけられ居ることを知承すればなり。理性の示導は、げにかかるものから、わが胸には、理性以外に、なほ熱つき情感の迸溢するものあるを奈何。

才ある若かき子の死を懷ふて、郊野に行く雲の跡を逐ひ、巖頭に、往く水のながれを慕ひ居れば、なまなかわが生、此存在を辞するとの、寧ろ甚だ遲きを大に自らの不運の如く感ずるものなり。人は直下に、此等の考を、不健全なる思想なりといふ。健全、不健全とは、そも理性を、唯一の標準として、規定したるものなるか。若しいふ人の論據にして、單に所謂理性により、此情感を全然、排斥したるものならしめば、吾は寧ろ甘んじて、所謂不健全の名目を受領せんと欲する者なり。理性素より、吾等の信頼すべきものたり。然れども人間の思想に、極めて大あるもの、高きもの、貴きものと動くは、大抵眞實なる、この情感の刺激に因するにあらざるはなし。吾は時として、人の理性の、甚だ哀れむべきものにして、人の情感に、却て甚だ尊きものの存在するを認むるものなり。

樹暮れ、森暮れ、岩暮れて、鳥は巢に在り、雲は岫に還れり。流れの末は、闇の幕に鎖されて、懷つかしの夕映の姿、復た全く見るべからず。獨りわが身のみ、あらゆる消へたるものの中に消へ

すして、依然、冷やかなる石上に残り。始めなく、終りなき妄想の絲襪を繰りかへして、天地獨住の孤兒、いつまで無情の世路に、慥み、もたね、苦まんとするか。眼を擧げて見かへれば、木立の蔭に、青く輝やける旅館の燈火、さながら此光景の寂寥を哭するものの如し。(完)

孤影

か　す　を

あらしは過ぎ、雨はやみて、靜かなる夕となりぬ。廣野の末を見渡せば、秋の雲低く垂れて、この世は闇に包まれんとす。昔を忍ぶ折々、登るに馴れたる丘の上に我はたゞ獨り坐せり。

手にせる笛を調べんには、あまりに悲しき夕哉。風一陣、颯と渡れば、後の山には、樹々の梢ざわめき、前の流れには、水激して岩に碎く。あゝ、山よ、水よ。

かゝる夕、我はなき母上を忍ばざるとはあらざ。優しき人なりき。生れて父親の顔をも知らざる我は、いかに母上を慕ひたりしぞ。されど、今は深き眠りに落ち給へり。どこしへに、永久に。我は、廣きこの世に、たゞ獨り見捨てられて立てり。

身は牧童、わが薄命を泣けばとて、誰しあはれと見給はん。泣かじ、泣くまぢ。我は破れん計の切なき思を、たゞ、この小さき胸に秘めん。

れど、月は今東の空に昇りぬ。波は興ありげにその影を浮べ、林は絲の如きその光を浴びつ。あゝ、静けき月の光よ。

なれば今雲間より其頭を出だし、さて何をか照らせる。闇けゆく下界の丘の上、立つは、樂しき生